

都会の夜の屋上で～年上お姉さんとの初体験～③

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「たまには、息抜きしに行こうか」

そう提案したのは、俺だった。

「息抜き？」

瑠理が、いつもの癖みたいに小首を傾げる。

「ああ。だってさ、ここ最近ずっと勉強ばっかじゃん。たまには遊びに行こうぜ」

そう言うと、瑠理の表情に、ふっと影が落ちた。

そして、おずおずと――

「……遊んでも、大丈夫？ 私、ほんとに大学に合格できる？」

三浪目。

その重さを考えれば、不安になるのも当たり前だ。

この人生の停滞から今度こそ抜け出したいって気持ちも、嫌というほど分かる。

「自分の偏差値、ちゃんと見てみなよ。もう“有名私大なら普通に射程圏内”って数字だぜ？」

「そりゃ、そうだけど……」

視線を落としながらも、否定はしない。

実際、今の瑠理の成績なら、首都圏の名前の通った私大は、十分狙えるところまで来ている。

しかも、まだ受験までは数ヶ月ある。ここから詰めれば、まだ伸びる余地もある。

「大丈夫だって」

それは根拠のない慰めじゃない。

ここまで横で見てきた“積み重ね”に対する、素直な評価だった。

――それに。

俺は、彼女との“思い出”を作っておきたかった。

受験が終われば、俺は地元の医学部。

瑠理は首都圏の私大。

その時が来れば、たぶん俺たちは、自然に離れ離れになる。

じゃあ、その前に。

もう少しだけ、同じ時間を共有しておきたい。

「さあ、地下に行こう！」

そう言って、俺は彼女を無理矢理連れ出した。

「さ、地下行こう」

「……地下？」

そう言って、俺は半ば強引に、彼女の手を取った。

ぐいっと引けば、瑠理も小さく笑って、ちゃんといってくる。

勉強も、受験も、将来も大事だ。

でも――今この瞬間、彼女と過ごせる時間は、きっとそれと同じくらい大事だと思った。

「智史、免許も……車も持ってたんだ」

瑠理は助手席で、ぽつりと呟くように言った。

「ああ。滅多に乗らないけどね」

免許取り立ての初心者マークがついたスポーツカー。

自分でも似合っているとは思わないが……今日は別だ。

「どこに連れてってくれるの？ あんまり……知ってる人がいるところは嫌なんだけど……」

その理由は、分かりきっていた。

親や友達に、男と一緒にいる姿を見られたくない。

「だから車なんだよ。わざわざ遠くまで来てるんじゃない」

俺はちらりと横目で彼女を見る。

「とりあえずデパート。——水着、買いに行こう」

「……水着？ 海でも行くの？」

「ああ！」

胸の奥が勝手に高鳴る。

そんな自分が少し恥ずかしいけれど、抑えられなかった。

だって——俺にとって“人生で初めてのデート”なのだから。

車を走らせて一時間。

この距離なら、さすがに瑠理の知り合いに会うことは滅多にない。

「はい」

俺は駐車場で車を降りると、そっと財布からお金を取り出して差し出した。

「……え？ 何これ？」

「水着代。好きなの買ってきたよ」

「いいよいいよ！ 私が出すから！」

瑠理は慌てて手を振る。

その反応が、なんだか可愛くて笑ってしまいそうになる。

「いや、今日は俺が誘ったんだし」

「だからこそ、いいの！ 本当にいいから！」

瑠理はぷるぷると首を振った。

「日頃、勉強でお世話になってるし……もう、これ以上なにかしてもらえないよ。それに

私、結構お小遣いもらってるから。安心して」

言うだけ言うと、ぱっと笑顔が弾ける。

「さ、行こ！ 今日は遊ぶ日でしょ！」

さっきまでの不安げな表情が嘘みたいに、

はしゃいだ声がデパートの広い通路に響いた。

——久しぶりの“羽根伸ばし”なんだろう。

水着売り場に着くと、

「じゃあ智史は、ちょっと待ってて。……どっかで時間潰してきてよ」

「えっ？ 折角、ここまで来たのに」

本音を言えば——一緒に選びたかった。

どんな水着を選ぶのか見たかった。

というか、見守りたかった。

「だって、水着姿は“後で見せる”ほうが良くない？」

にひっと笑いながら、肩を軽くすくめる。

「だから、智史はどっか行って。ね？」

う……抵抗していたら、彼女は上目づかいで、

「お願い……」

と、甘えるように言ってきた。

そこまで言われたら——もう勝てるわけがない。

「……わかったよ。じゃあ、本屋にいるから。終わったら連絡くれ」

「うんっ！」

パッと花が咲いたみたいな笑顔を残して、

瑠理は水着売り場へ駆けていった。

俺はというと、後ろ髪を引かれすぎて首が痛くなりそうな気分で、しぶしぶ本屋を探し始めた。

田舎出身の俺には、都会のデパートで本屋ひとつ探すのに手間取った。ようやく辿りついて文庫本をばらばら眺め始めたところで、すぐに瑠理から連絡が来た。

……これじゃ、本屋に来た意味ないじゃないか、と内心ツツコむ

水着売り場に戻ると、彼女はもう買い物を済ませたようで、袋を大事そうに抱えていた。

「この中身はお楽しみだからねえ～」

いたずらっぽい笑みで、わざと俺を挑発してくる。

実際、どんな水着を選んだのか気になって仕方がない。けれど——。

「じゃ、行こうか」

俺たちはデパートを後にした。

海水浴場に着くと、夏休みとあってか、都市部だからか、人の多さに圧倒された。

駐車場に車を停めるだけでもひと苦労だ。

着替え室に向かい、俺が先に砂浜へ出る。

「あっつ……」

思わず独り言が漏れた。砂が熱い。照り返しも強い。

数分後——

「おまたせ～」

振り返った瞬間、息が止まった。

瑠理は、黒のビキニ姿だった。

まるでグラビアアイドルのような、攻めたデザインだ。

いつもの清純な雰囲気はどこにもない。

その気持ちが素直に伝わってきて、胸が少しだけ温かくなった。